

招待席

石田 波郷

いしだ はきょう 俳人 1913.3.18-1969.11.21 愛媛県松山市に生まれる。五十崎古郷、水原秋桜子に師事し、馬酔木同人。昭和十二年（1937）俳誌「鶴」創刊主宰。中村草田男、加藤楸邨とともに人生探究派と呼ばれ、戦後は江東の焦土諷詠、結核による入院、手術を詠った療養俳句で注目された。昭和三十年（1955）『定本石田波郷全句集』により第六回読売文学賞を受賞。句集のほかに『清瀬村』『俳句哀歓』『江東歳時記』など。掲載の二百句は、平成十六年（2004）五月、電子文藝館のために嗣子石田修大氏の新たな撰を得た。

波郷二百句

プラタナス夜(よ)もみどりなる夏は来ぬ (『石田波郷句集』より)
バスを待ち大路の春をうたがはず (以下『鶴の眼』より)
あえかなる薔薇撰(え)りをれば春の雷(らい) 銀座千疋屋
春の街馬を恍惚と見つゝゆけり
夜桜やうらわかき月本郷に 上野公園
昼顔のほとりによべの渚あり
噴水のしぶけり四方(よも)に風の街
霧吹けり朝のミルクを飲みむせぶ 神津牧場にて
描きて赤き夏の巴里をかなしめる ある画廊にて
日出前(ひのでまへ)五月のポスト町に町に
ひとゝゐて落暉(らつき)栄(はゑ)あり避暑期去る
小劇場かんかん帽を抱く一刻
袴暑し金を集めて街ゆけば
蝉の朝愛憎は悉く我に還る
百日紅ごくごく水を呑むばかり
雀らの乗つてはしれり芋嵐
秋の暮業火となりて秬(きび)は燃ゆ
明治節乙女の体操胸隆く

吹きおこる秋風鶴をあゆましむ
 古郷忌を人にはいはず日暮れぬる 九月五日
 昼の虫一身斯かるところに置き
 寒卵(かんだまご)薔薇色させる朝ありぬ
 雪嶺よ女ひらりと船に乗る
 冬青き松をいつしんに見るときあり
 はたと寒く傷兵を見し行人裡(かうじんり)
 英霊車去りたる街に懐手(ふところ)で
 冬日宙少女鼓隊に母となる日
 悉く芝区の英霊木枯(こが)れたり
 隙間風兄妹に母の文異(たが)ふ
 初蝶やわが三十の袖袂 (以下『風切』より)
 花ちるや瑞々しきは出羽の国 帰京車中
 直(ひた)はしる蜥蜴(とかげ)追ふ吾が二三足 明石城址
 女来(く)と帯纏(ま)き出づる百日紅
 夏すでに兄妹懈(ものう)く叱り合ふ
 椎若葉わが大足をかなしむ日
 紫蘇濃ゆき一途(いちづ)に母を恋ふ日かな
 東京の椎や櫛や夏果てぬ
 新娶(にひめとり)まさをき梅雨の旅路かな
 雀らも西日まみれやねぶの花
 胸の手や暁方は夏過ぎにけり
 朝顔の紺のかなたの月日かな
 葛咲くや孀恋村の字(あざ)いくつ
 一高へ径(みち)の傾く芋嵐
 槇の空秋押移りゐたりけり
 寒椿つひに一日のふところ手
 浅間山空の左手(ゆんで)に眠りけり
 霜柱俳句は切字(きれじ)響きけり
 萬緑を顧みるべし山毛櫸(ぶな)峠 (『風切以後』より)
 雁(かりがね)やのこるものみな美しき 留別 (以下『病廬』より)
 出発(いでた)つや疾風の如く稲雀
 ぐざと麦の芽をつかみたる銃弾下(か)
 三月の鳩や栗羽を先づ翔ばす
 雷(らい)落ちて火柱みせよ胸の上
 秋の夜の憤(いきどほ)ろしき何々ぞ
 秋の風萬の袴を汝一人に 一子修大に

一茶忌や父を限りの小百姓 わが兄弟三人悉く戦陣に在り

よるめくや白衣に浴ぶる冬日ざし 上陸

鳩(にほ)の岸女いよいよあはれなり (以下『雨覆』より)

百方に餓鬼うづくまる除夜の鐘

屋根裏に寒の朝日の黄金なす 東京に帰住む、自ら悲喜を弁(わきま)へず

細雪妻に言葉を待たれをり

枯葎馬車はいくとせ鉄運ぶ

焼跡の幾日冬日燃えざるや

貨車寒し百千の墓うちふるひ

百方の焼けて年逝く小名木川(おなぎがは)

グノー聴け霜の馬糞を拾ひつゝ

なみだしてうちむらさきをむくごとし

遙なる伊予の国幾年会はぬ母を思ふは

束の間や寒雲燃えて金焦土

立春の米こぼれをり葛西橋

三月の産屋障子を継貼りす 長女温子出生

はこべらや焦土のいろの雀ども

田楽に舌焼く宵のシユトラウス 焦土食膳

擁(かいだ)くや夜蛙の咽喉うちひゞき

金雀枝(えにしだ)や基督に抱かると思へ

栃咲くやまぬかれ難き女の身

六月の女すわれる荒筵(あらむしろ)

虹まどか妻子は切に粥をふく

雷(らい)の下キヤベツ抱きて走り出す

日々名曲南瓜ばかりを食はさるゝ

子の涙こんこんと出づ涼しき如

白桃や心かたむく夜の方

夏河を電車はためき越ゆるなり

栗食(は)むや若く哀しき背を曲げて

風の日や風吹きすさぶ秋刀魚(さんま)の値

稲妻のほしいまゝなり明日あるなり

妻よわが短日の頬燃ゆるかな 熱やまず (以下『惜命』より)

寒き手やいよいよ恃(たの)むわが生きて

霜の墓抱き起されしとき見たり

夜半の雛肋割(あばら・さ)きても吾死なじ

茎立(くくたち)や懈(おこた)るまじき女の手

えごの花一切放下なし得るや

満天星(どうだん)に隠りし母をいつ見むや 母帰郷
 妻が来し日の夜はかなしほとゝぎす
 たはやすく過ぎしにあらず夏百日
 桔梗(きちかう)や男も汚れてはならず 某君に
 鴟の朝肋あはれにかき抱く 手術日決る
 冷(すさま)じき黄裸なるとき孤りなり
 たばしるや鴟叫喚す胸形変(きようぎやうへん)
 麻薬うてば十三夜月遁走す
 秋の暮澠(しびん)泉のこゑをなす
 力つくして山越えし夢露か霜か
 悴(かじか)み病めど栄光の如く子等育つ
 病む師走わが道或(ある)はあやまつや
 病む六人一寒燈を消すとき来
 綿虫やそこは屍の出でゆく門
 白き手の病者ばかりの落葉焚
 雪はしづかにゆたかにはやし屍室
 梅も一枝(いつし)死者の仰臥の正しさよ 武田君死す
 七夕竹惜命(しやくみやう)の文字隠れなし
 悉く遠し一油蝉鳴きやめば
 朱欒(ざぼん)割(さ)くや歡喜の如き色と香と
 寒夜水飲めばこの最小の慾望よ
 遠く病めば銀河は長し清瀬村 (角川文庫版『石田波郷句集』所収「惜命」より)
 あかあかと雛栄(は)ゆれども咳地獄 (以下『春嵐』より)
 春嵐鐵路に墓を吹き寄せぬ
 病家族二つの蚊帳の高低(たかひく)に
 咳きに咳く日矢太東にひれふして
 病むかぎりわが識りてをる枯野道
 雑炊や頬かがやきて病家族
 手花火を命継ぐ如(ごと)燃やすなり
 夾竹桃戦後の病(やまひ)みな長し
 蚊を搏(う)つて頬やはらかに癒えしかな
 煤煙のうつろふままの歳暮光
 一点の蠅亡骸の裾に待す
 泉への道後れゆく安けさよ
 汗の胸この創痕に仕ふるか
 寒雀汝も砂町に煤けしや
 草木瓜(くさぼけ)や故郷のごとき療養所

椎櫂も祝福す桃紅らむを
 百千の土管口あけ雪降り
 蛍火や疾風のごとき母の脈
 妻子にも後れ斑猫(はんめう)にしたがへり
 砂町も古りぬ冬日に温(ぬく)められ
 鶏頭の澎湃(はうはい)として四十過ぐ
 惜命(しやくみやう)の杖に裾濃(すそご)の冬日射す
 屋根赤き砂糖工場も暮春かな
 起ち上らざるもの胸に萩起す
 とまり木に隠れごころや西行忌 某酒場にて (以下『酒中花』より)
 利休梅病情をつひの性(さが)としぬ
 壺焼やいの一歩の隈(すみ)の客 西銀座卯浪
 万愚節半日あまし三鬼逝く
 病経てやや気弱にて椿市
 田螺和(たにしあへ)彼我死にゆきし者ばかり 疎開生活を偲ぶことあり
 赤鬼は日本の鬼鬼やらひ
 金の薬(しべ)巨き椿に今日溺れむ
 半眼に椿憂きまで満ちにけり
 為さざりしことのみ春の落葉焚
 浸け古りし梅酒プラム酒病家族
 万太郎逝きて卵の花腐(くた)しかな
 沙羅の花捨身(しやしん)の落花惜しみなし
 わが胸の陥没部位よ菖蒲泛(う)く
 泰山木巨らかに息安らかに
 昼の虫われに永仕へせし妻よ
 柿食ふや命あまさず生きよの語 橋本大人が母堂の語を録す
 日本の苗字(みやうじ)や露の子等点呼(てんこ)
 秋いくとせ石鎚山(いしづち)を見ず母を見ず
 三鬼亡き磯は一すぢ天の川
 暮れはててなほ鳴く蝉や敗戦日
 独活(うど)は実に終(つひ)の栖(すみか)を棟上げす
 練馬谷原町に居を定む
 湯気あげて小部屋めでたしちやんこ鍋 錦島部屋
 いつも来る綿虫のころ深大寺
 木葉髪一病息災の語を温め
 人待つ如(ごと)人厭ふごと着膨れぬ
 冬山に轍(わだち)や還らざるごとく

平凡に五十頭上の初雀
 櫟(ゆづりは)や厭ふべきものはひた厭へ
 心萎えしとき箸逃ぐる海鼠(なまこ)かな
 白息を掌(て)にかけて今日のはじまりぬ
 亡師ひとり老師ひとりや龍の玉
 病まぬ生(よ)より病める生(よ)ながし石路(つは)の花
 母の亡き今日暁けて石路梅もどき 十一月十一日母死す
 橙(だいだい)や病みて果せぬ旅一つ
 しんしんと子の血享けをりりラ匂ひて
 ここに酸素湧く泉ありクリスマス
 ききわびて終(つひ)の栖(すみか)の除夜の鐘
 寒菊や母のやうなる見舞妻
 見舞妻去りしより除夜いよよ急
 春雪三日祭の如く過ぎにけり
 ほしいまま旅したまひき西行忌
 朴(ほお)の花今年見ざりし命かな
 柿食へり貪るに似しをゆるめ食ふ
 木葉髪おほかたはわが順ひぬ
 雪降りり時間の束の降のごとく 十二月十九日雪
 春菊や袋大きな見舞妻 (以下『酒中花以後』より)
 かへり来し命度(つつ)しめ白菖蒲
 蛸籠われに安心(あんじん)あらしめよ
 命美(は)し槍鶏頭の直なるは
 人はみな旅せむ心鳥渡る
 萬両や癒えむためより生きむため
 元日の日があたりをり土不踏(つちふまず)
 命継ぐ深息しては去年今年(こぞことし)
 息吐けと立春の咽喉切られけり
 蕨和(わらびあへ)忘語かなしく口とざす
 豆飯食ふ舌にのせ舌に力入れ
 彼の辻の灯の合歡妻(ねむ)は過ぎけむか
 敗戦日空が容れざるものあらず
 今生(こんじょう)は病む生(しょう)なりき烏頭(とりかぶと)
 葉鶏頭われら貧しき者ら病む
 遺書未だ寸伸ばしきて花八つ手
 露か雨か十一月ははじまりぬ